
俺と魔王

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と魔王

【Zコード】

Z7344M

【作者名】

ねむ二

【あらすじ】

異世界に召喚された俺は軽く絶望した。理由は簡単、目の前にいたのがイケメンだったからだ。これはごく平凡な俺が、元の世界へ帰る（予定の）物語・・・のはずだ。 不定期更新です

第一話 召喚された俺

俺は泣いた。

力の限り泣いた。

それはもう濁流が渦を巻くかのじとく。

目の前には男がいる。

それはもうお前存在していいのか?とこうへりーのイケメンが足元では素敵な魔法陣が「ごめんよ」と詫びているようだった。

俺は泣いた。

普通ここで登場するのは少女、もしくはお姉さん（いつなつたらギリギリ熟女でもオッケイだ!）しかないだろ?。

俺は泣いた。

だが俺の表情筋が動いた様子は皆無だったようだ。

無論涙も流れていない。この16年俺の表情筋は常に省エネモードだ。

ゆつくりと神々しいイケメンが俺に近づく。

だがちょっと待ってくれ。セオリー通りなら初めて出会ったひと（当然女性に限る!限らせてくれ!!特に巫女とか王女!）が恋人になつたりするのだ。何が悲しくてイケメンと出会わにゃならんのだ!魔法陣の外側に立つたイケメンが口を開く。

ああ、聞きたくない。お前の頼みなどこれっぽっちも聞きたくない。絶対ろくでもないものに決まってるからだ。

しかしここで俺は閃いた。それはとても素晴らしい閃きだった。

そう!このイケメンに妹か姉がいる可能性だ!!未亡人ママンがいてもそれは除外だ!当然だろ?このイケメンにパパなんぞ呼ばれたくはないからだ!!

その可能性に気づいたとき、俺は自分からイケメンに近寄った。
一步だけ。

イケメンは言った。

「すまん、間違えた。」

と。

俺は泣いた。

柔らかな風吹く草原の、見渡す限り草原のど真ん中にある屋根しかない小さな神殿で。

イケメンが一体なにをしようとしたのかはわからなかつたが、俺は間違えて召喚されたらしい。

残りヒットポイントが1までダメージをくらっていた俺だったが、なんとかいつも通りの感情のあまりこもっていない声をだした。

「・・・で、本当はなにを召喚しようとしたんだ?」

「いや、ちょっと、その・・・」

わずかに視線をそらせるイケメンに俺はパンときた。

「いや、女をよみがへとしたな。

こんなイケメンでも他から女を召喚しなけりやキツイ世界なんて。

俺はイケメンに激しく同情していた。

思いつきつゝ哀れみをこめてイケメンの肩をぽんとたたく。

「まあ、誰にだって失敗はあるさ・・・」

俺の憐憫と同情と哀惜の混じった視線を受けてイケメンは傷ついた
ように弱々しく笑う。

きっと本当に傷ついているんだろう。

こいつはイケメンで性格も良さそうだ。なのにモテない世界なんて
俺がいても仕方ないだろう?

俺を表す言葉は平凡マスター、または旅立ちの村に住む村人ひだ。
村人ひなんて一回話しかけるかどうかの存在だ。家の引き出しにあ
る薬草を勇者にパクられてハイサヨナラな存在。

やはりこんな俺ではこの世界では分が悪い。いや、悪いビジョウじや
ない。最低ラインだ。

魔法があつても恋ができるないんじやこちとらお呼びじやないってん
だ。もちろんイケメンは対象外だ。言つまでもないことだがな!

「じゃあ、そろそろ俺を元の世界へ帰してくれないか?」

この世界に見切りをつけて俺は帰る。
元の世界へと。

「・・・悪い、な。今は君を歸す方法がない・・・」

「・・・な、な、な・・・ななつ・・・!」

そつ、そうだ！もいかいやれ……わざの駄騒もつかいやりやがれ……このイケメンが……！」

「イケメ？・・・あ、いや、次の機会は半年後になる。それと、君を帰せるのも半年後だ。」

ふつ。半年後だろうが一年後だろうが帰れるという事実に俺はなんとか落ち着いた。

やないと判断して、俺はイケメンに告げた。

「これから半年、お前に女心について教えていくつもりだ！お前ほ
どのイケメンなら女は即落ちる！だが安心してはいけない！釣つた
魚にもたまには餌をやれ！」

こうして俺のフレンドリストにイケメンが追加される。
そしてイケメンは言った。

「よくわからないが……どうやら君はいいやつだな。これから半年、我が魔王城で暮らすとい。でもただけのもてなしがせてもいい。」

٦٣

俺は旅立ちの村に住む村人ひだ。LVなんて1かそれ未満に決まつてる。勇者のLV1とはわけが違う！溝は深いのだ！！なのになぜ

魔王と住まねばならんのだ！？相手はラスボスではないか！！？
俺のなげなしのヒットポイントが簡単に抉られる。 1しかなかつた
それは当然オーバーキルされて・・・

俺は倒れた。

倒れた瞬間、俺を受け止めたなにかは柔らかかつた気がした

第一話 田覚めた俺

田覚めると俺はベッドの上だった。

ぼんやり見回し、どここの豪邸かと考えたところだと思い出す。

そうだ、俺はイケメンに拉致されたのだ、と。

もう一度部屋を見回す。部屋は広く、大きな窓から光が差し込み妖精さんでも訪ねてきそうだ。白い縁取りの窓の両脇には白いレースのカーテン。家具はアンティーク調でベッドも天蓋つきな上位でかい。布団もふりふりな飾りがついている。どこだここ。あ、魔王城か。魔王城？

魔王城つてもつと基本黒か紫でシンシントゲトゲして飾りは骸骨やら蝙蝠の翼とかでどこからともなく変なものが溢れ出ているようなもんじゃなかつたのかよ！？

ああ、魔王城のイメージが覆される。

かすかにダルい体でベッドからおりると、手近な椅子にこげ茶色のローブがかけられているのに気がついた。たぶんこれを着ろつてことなんだろうが・・・少し体にあてて、やめにした。

これは躊躇長さだ。俺には無理だ。

ローブを椅子に戻し、これからどうしようと迷つてると扉を小さくノックする音がする。扉を見ればわずかに開いて中の様子を見ようとしているようだ。どうやら無理に起こす気はなかつたのだろう。寝てるならまた後にするとか。

ほんとに性格が良いイケメンだな。魔王だけど。

「起きてるよ。」

一声かけるとイケメンがゆっくり扉をあけて入ってくる。『ううへ
同じ高さに立つてわかったのは、このイケメンと平均より若干・・・
若一千！だが低い俺との身長がほぼ同じことだつた。むしろ
俺しか僅かだが高い。よし。

イケメンはすくすくした長毛のローブを着ている。色は灰色で袖も
長い。指先がちょっと出でてゐるだけだ。もつと派手なものをして
お前なら似合つだろ？』。『ううへ
輝く金髪と煌く紫水晶の瞳に少し毒気を抜かれたような気がする。
部屋が部屋だけにイケメンのせいだけとも言い切れないが。

「『ううまで魔王、やまが・・・』

なんと呼んでいいのか迷い、一応間違いではないだろ？呼び方をし
た。その瞬間、ちょっと顔を曇らせたイケメンにピンとくる。

「あーっと、俺の名前は有沢悠也。たぶんあつてると思つが、『う
風にいえばコウヤ＝アリサワだな。で、魔王さまの名前は？』
「えつ、あ・・・私はパトリシア＝ファンテミコー。その、よひじ
くな。」

わずかにほほえんだイケメンが少し可愛く見えたのは錯覚だ。俺は
起きたてだからな。

でもパトリシアって女の名前じゃなかつたか？・・・？ そうか、この
顔なんだ。女だと勘違いしてつけられたのかもな。『ううへ
イケメンなら子供のころはよく女に間違われたことだらう。
悲しいことにその経験は俺にもある。お前の気持ちは痛いほどわか
るだ。

「うひーちーんよろしくな。俺のことはコウヤでもコウでもヒーリングもいい。お前のことはなんて呼べばいい?」

「わ、私のことはパーティと呼んでくれ。」

そりゃそうだよな。人前でパトリシアなんて呼ばれたくはないもんな。絶対からかわれる。

俺の中でパーティに対する親密度が1↑上昇する。1だ。1だけだ!

第二話 懐かれた俺

あれから一ヶ月ほど経つた。

この世界はパパーテ、神の掌という意味らしい。
パパーテが神の掌。パパが神でパーテが掌か？またはその反対か？
どんな言語にしろパパーテなんて一つとある名じゃないな。

そんな世界で気づけば俺のパーティに対する親密度は40になつていた。

俺は日が腐つてきたのかもしれない。

日が経つにつれパーティが可愛く見えるときがたまにあつて焦る。
今思い返せば最低一日一回は親密度が1は上がつていた気がする。
おかげでパーティも変に懐いていて今さらよそよそしくするのも気が引ける。

そういうえばこの城でパーティ以外のヤツに会つた覚えはない。
ああ、だからパーティは誰かを召喚しようとしたのか。

こんなところに一人ぼっちじゃ寂しいもんな。

それで話し相手とか友達とか喚ぼうとしたのかもしれない。
勝手に女と決めつけて悪かつたな。

「なあ。この世界の衣装の流行なんて俺は全く知らないわけだが、
パーティにはそういう色よりもっと明るい色の方が似合つと思つぞ。」

パーティの焦げ茶一色のずるずるロープを見ながら、ふとそんなことを口にした。

前々から思っていたのだがパーティはどうしてこんな地味で暗い色ばかり着ているのだろう。

例えこれが流行の最先端だとしても俺は認めん。絶対認めん。

「ねつだ、パーティに合つサイズでいらない服とかないか？」

そう言つた俺が連れて行かれたのはパーティの衣装部屋だった。

部屋は小ぢんまりしていて、そこにあつたずるずるロープは思つていたより少なかつた。

その中からパーティが持つてきたのはクリーム色のずるずるロープとサーモンピンクのずるずるロープだった。

「この2着ともこりないの？」

「こくりと頷くパーティ。

「なんで？」

純粹な疑問だつた。たしかにクリーム色とサーモンピンクなんて魔王が着る色じやなさそうだが、持つてゐることは前は着てたんじやないか？

「・・・色が、子供っぽいから・・・

少し恥ずかしそうに言つたパーティが可愛く見えた俺はやはり目が腐つてゐるな。

それにして着る予定のなくなつた服をまだ持つてることはパーティはもの大事にするヤツみたいだ。もしくは他の何かにリサイクルするつもりだったのかもしれん。やっぱ良いヤツだ。

パーティに対する親密度が1上昇する。

ま、これは仕方ないか。勿体無い精神は日本人の心に響くものがあるからな。

「この2着、俺が好きにしてもいいか？」

クリーム色のするするローブとサーモンピンクのするするローブのハンガーを片手ずつに持ち、やや持ち上げてみる。

どちらも今パーティが着ているするするローブとほとんど変わらない。2着を順に見てから俺をじっと見つめてパーティは小さく頷いた。

これなら多少手を加えるだけで少しあまりシなものができるかもしれない。

自分の部屋に持ち帰るとベッドの上にずるずるローブを広げ、裁縫セットをパーティに借りて作業に入る。

あ、と思って立つたままのパーティを見上げた。

「ちょっと時間がかかるから、お前は好きなことしていいが。」

しばらくは単調な作業が続くはずだ。こんな作業見ててもつまらないだろうと思ったが、俺の手元を見ていたパーティが一つ頷くとボスンと右隣に座る。

「邪魔じゃないなら見てる。」

ハサミを持つ手を見つめるパーティを横田で見てから俺は作業に入つた。

まずはクリーム色のするするローブの首周りをカーブを描くように大きく切り取り首のラインと鎖骨あたりが出るようにする。次に腰のあたりでバツサリと裁ち、下のするする部分と分ける。袖にとりかかるとして、パーティの肘の位置を確かめようと鱗を振り返った。

「パーティの肘つてどのへん？ちょっと袖捲くつてみ？」

少し首を傾げたパーティが左の袖を捲くる。

なんつーか白くて華奢な腕だな。まあパーティなら筋肉ムキムキで大剣振り回してるのは魔法を使う方が似合つてるかと納得する。ハサミを置くとパーティの左腕を持ち上げて肘の位置を確認する。肩からこのくらい、と田星をつけてクリーム色の袖にハサミをいれる。

もう一着のサーモンピンクのするするローブも同じように切つていく。

こつして出来上がったのは各々2色のパーティ、肘までの袖がついた胸部分と腰から下のするする部分、肘から先の袖部分が2枚と首周り部分だった。

今回、首周り部分は使わないからこっちへ置いとく。

あとは端の始末をしてから色違いに繋げて・・・・・つと。

あ、いいこと思いついた。

裾で広がっていたするする部分の前側、左足の前あたりを縦に細長い三角形に切り取るともう一方のするする部分からも同じように切

り取り、交換して少し内側で縫いとめる。

こうすれば足が動く度に違う色がちらつと見えてオシャレだ。袖も先が広がったタイプだったので肘から先の部分にも応用する。元よりは裾の広がりが抑えられた形に仕上がった一着目のずるするローブ改をざつと確かめてから隣のパティに手渡す。

「これ着てみ。」

受け取ったパティが少し戸惑つたようにローブと俺の顔を交互に見てくる。

思つたより少し派手になつたが、まあ子供服をリメイクしたくらいのもんだしな。やっぱ恥ずかしいか？でも一回着てみるともう一度促すと、渋々パティがベッドから降りて鏡のほうへ行く。野郎の着替えなんぞ見たくもないのに、一着目の仕上げにとりかかつた。

俯いた視界にそつと入つたサーモンピンクに視線を上げる。俺はついに目が腐りきつたことを自覚した。

そこにいたのはパティはパティだが、女版パティだった。

どう？つて感じでちよつと裾を広げてみせるパティにお前はどこの国姫かと問いたい。

これは男これは男これは男これは男これは男これは男これは男これは男これは男これは男これは男！

こめかみに手をあて必死に呪文を唱える。

パティは男、よし。

「いいんじゃないか？さつきのよりは良いと思つだ。」

俺の指先マジックで華麗な変身を遂げたパティに笑顔を向けた。

第四話 再び召喚された俺

どこか嬉しそうにしていたパーティの表情が変わる。はつとしたように床を見つめ、そして俺を見た。

「ユウー！」

焦ったように俺を呼ぶと自分のしていた首飾りを引きちぎり俺の手に押し込む。

なんだ？ いつものパーティらしくないぞ。

首飾りを返そうとした次の瞬間、俺の全身が光に包まれ半透明になつっていく。

イヤな予感がする。慌てて立ち上がり足元を見れば変な模様の魔法陣が回転していた。

これはアレだ。元の世界に帰れるか別のヤツに召喚されるか。

「ユウー！」

かすれゆく視界でパーティの悲痛な叫び声だけが鮮明だつた。

俺は泣いた。

戻ってきた視界に俺は帰れたわけじゃないことを知ったからだ。

白い柱の数々と白い壁、床も天井も白い。なんか神殿の一室っぽい。

手の中の首飾りを涙目で確認する。紫の石のついたシンプルな銀色のチョーン。

パーティの瞳と同じ色のそれをズボンのポケットにしまって、まわりの人物を見回した。

金髪の男が一人、金髪の女が一人、こげ茶のしょぼしょぼの髪のおつさんが一人、赤い髪の女が一人。それぞれ豪華な服装だった。金ぴか軽装鎧に引きずつた分厚いマントとか派手派手ドレスとか。大きな石のついた指輪とか首飾りとかじやらじらつけて、それでいて衣装との統一性がない。全てが自己を激しく主張している。はつきり言つて趣味が悪い。

俺は泣いた。

パーティに慣れたせいかもしぬないが恋ができるそうのが一人もいないことに。

どうしてお前らはそんなに老けているんだ。

そのうえお姫様っぽいのなんて一人とも化粧がけばすぎる。若作りを多大に失敗した感じだ。

王子っぽいのはどっちも下半身白タイツにショートブーツのみだ。なんでだよ！いやだ！こんな国で俺は恋なんてできそうにない！恋をがんばりたくもない！

俺は流れてもいい涙を拭つた。

おつさんが一人だけ王冠みたいなのかぶつてるからこの人は王様か？金髪の四人は顔立ちからして兄妹だろう。じゃあ赤い髪の女はお妃さまか？

だとしたらこの兄妹、両親のどっちにも似てないぞ。

つーかお妃さま、こんなでかい子供が四人もいるようには見えない。ん？なら金髪の兄妹は誰から生まれたんだ？もしやお妃さまは後妻か？

まあ、見ず知らずの他人の家庭事情なんてどうでもいいか。それより早く帰してくれ。元の世界かパーティんどこに。

だいたいさつきから金髪男一人の俺を見る目が気持ち悪い。上から下まで舐め回してるように視線に辟易する。

何の目的で喚んだのかは知らんが友達が欲しくて召喚したパーティのほうがマシだ。

あいつはそんな目で俺を見なかつたからな。態度も紳士で控えめ。やっぱパーティしかマシだ。

こんなところでパーティへの親密度が1上昇する。まあこれも仕方ないか。

おっさんが一步前へ出た。

「わたくしめはこの国の王を務めております。異世界より遠路はるばるよつこおいでくださいました、勇者様。」

揉み手というものを俺は生まれて初めて見た。マジで揉むんだな。へえ。

「ああ、突然のことに驚かれたのですね。ですがあなた様は間違いなく勇者様ですぞ。こうしてここにいることが何よりの証拠。」

ほつほつほー!と何がおかしいのかおっさんが一人笑つている。何だか悪徳商人に引っ掛けた気分だ。これは逃げるに限るな。だがここがどこかくらいは把握しておるべきか。せめてパパパーテであつてくれ。

「・・・異世界と仰いましたけど、これは何という世界でしょうか?」

できるだけ下手に出ておく。

薄い頭髪、でっぷり出た腹、イヤな笑い方。

見た目からして上からものを言つてはいけないタイプだらう。

「「」の世界はパパパー^テ。古の言葉で神の掌^とう意味です。」

「「」の世界はパパパー^テ。古の言葉で神の掌^とう意味です。」

おっさんとは違ひ声に振り向く。

そこには金髪の男が一人、にこやかに立っていた。いや、にこにやか。

どつちが喋ったのか知らんがパパパー^テなら問題ないだろ^う。そんな名前^一つとないだろ^う。たぶんパーティのいる世界だ。

「あなたには遙か東に存在する魔王を倒してもらいたい。もちろんお礼はわせ^{ひらひら}。どつかな?」

背が高^こまつ^のくねくねした金髪が言^う。

「やうやう、魔王を倒してくれ^えすれば君の「」とはオレ達が可^愛がつてあげるよ。優しく、ね?」

続けて低いほうのバカが言った。
こ^こつらマジか、氣色わ^いいなど^どン^引いた^と「」で金髪女一人がくすくす笑いあう。

「お兄様たち^つたら。彼女はまだ「」へ來たばかりですよ?焦^つては逃げられてしまいましてよ、おほほほほ^ほ・・・」

「つふふ、本当に^お可^愛ら^しい方でお兄様たちのお^氣持^ちもわ^きりますわ。ねえ、お姉様?」

「ええ、そうね。おほほほほ^ほ・・・」

「つふふふふ^ふ・・・」

「どうか、お前^らに^ほの俺が女に見えるわけか。

子供の頃だけかと思つていたんだが・・・なににお前は今俺でもそう見えると。へええ。

誤解を解くべきか解かざるべきか。

もちろん解かずにつとおさらばだ！

万が一あつちの姉妹に迫られたら俺の大切な何かが失われる気がする。

こつちの兄弟も同様だが女と思つてゐつちほ多少は油断してゐはずだ。

それにしても魔王を倒すために勇者なるものを召喚するようなヤツらだ。

どうかに伝説の武器とか防具とかもあるんじやないか？
そんなものを持つた勇者があいつに喧嘩を売るのは困る。

パティは性格は良いが友達もいなかつたようなヤツだぞ。しかも独

身で一人暮らしだ。

いきなりの来客が勇者で敵対者なんて、そんなの寂しそうだろ。
こつちはもうちよつと穩便にこつぜ。

「あの、こちらに魔王に対抗できるような勇者の装備や伝説の装備などございませんでしょ？私の世界では勇者はそのようなものを装備して旅立つと聞いておりますので。」

本やゲームの中の話だけだ。

パティの友人第一号としてはそんなものがあればそれらをなるべく頂戴して去るのみだ。

相手の言葉を待つていると、ちょっと存在感が薄そうな赤い髪の女がおつせんの袖を引く。

「あなた、あれのことではございませんの？」

どんぴしゃ。

赤い髪の女がお妃をまだつたことと、やうこつ装備があるじこじ
とを知つた。

第五話 伝説の装備を見た俺

通された宝物庫で俺は泣いた。

すっげーしょぼい。

こいつらはギンギラギンでケバケバしいのに宝物庫がぼぼ空とせ。まあ俺には関係ないか。

そつそと貰つもん貰つておわらひするだけだしな。

宝物庫の中をお妃さまの後を追つて、ついでに物色する。たいした量もなく、指輪とか腕輪が黒い台の上にぽつぽつ転がつてるだけだ。

まじでしょぼい。

こんなところに勇者の装備なんてほんとにあるのかよ？あたりを見回しため息を吐きかける。

『なんじゃお主ー、いつたいどこに目をつけているのじゃー、妾の可憐な姿が目に入らぬのかー？』この無礼者がつー。

「いー！」

うろうろ纏わりつくちっちゃえのを無視していたら、怒鳴られたらえブーツの踵で足を踏まれた。

それなんて凶器。

急に蹲つた俺をお妃さまが不思議そうに振り返る。

何でもないですと立ち上がつたが、背中には銀髪幼女が首を絞めるよつじぶら下がつてている。

みんな総スルーなので無視していたが、これはいただけない。

半分透けてるからきっと幽霊だ。宝物庫に住み着く幽霊・・・おお、

恐ろしや。

『なつ、妾は幽霊などではないわ！』

器用にぶら下がりつつ後頭部を強打される。
まじで痛い。それと俺そんな趣味ないからね？
あと人の思考を勝手に読まないでほしい。
後頭部をさすりながらたどり着いたのは、そんなに広くない宝物庫
の一一番奥だった。

そこには燐然と輝く鎧・・・ではなく、一枚のマントがあった。
壁に掲げられた古ぼけた茶色の、ポンチョみたいな・・・
なにこれ。絶対魔王倒せないだろ。
むしろ足手まとい、

『見てわからぬか！』

人の背中を蹴つて飛び降りると、そこから「うう」と掛け声一発、
マントの手前に華麗に着地する。
しゃがんだ背中を向ける、黒いドレスに銀髪縦ロールの半透け幽霊。
もつたいをつけてゆつくつ立ち上がると、さらりと手で髪を払いな
がら振り返った。

『妾こそ数百年の時を経て今ここに復活せし・・・お主、何をやつ
ておる？』

俺はさつきお前に蹴られたせいでぶつ倒れてるんだよ。
訝しげな眼差しを向けてくるのはこいつだけじゃない。
お妃さまも見てるし後ろの5人の視線も感じる。
ようりと立ち上がり、何事もなかつたようにお妃さまを見た。

「これがですか？」

「え、ええ、そうですわ。今まで誰も装備できたものがいないといわれておりますの。」

装備する気がなかつただけじゃないのか？

改めて見てみても、ただの古ぼけたポンチョ、

『うつせいわこのたわけ！』

「あがつー！」

横から飛び膝蹴りを脇腹に食らつて俺は悶絶した。

それがどう見えたのか、お妃さまが「やはり伝説の装備だったのですわ！」とか言い出し後ろでは「これが継承の儀式！？」とか言つてるヤツもいるし。

俺は本氣で泣いた。

第六話 契約した俺

ああそれだ。心のどこかでわかつてはいたさ。

ここつがただの幽霊じゃなことぐらう・・・

『では準備は良いか?』

『ぐくっと喉を鳴らしたポンチョの精・メルティアーナが桃色の唇を舌先で濡らせる。

「ああ、いつも。」

メルの前に正座して顔の高さを同じにして、俺は待つ。この返答も幾度繰り返しただろうか。

『ではゆくわ。覚悟はいいな?』

その手にあるのはあの古ぼけたポンチョ。

今日は泊まれと『えられた城の一室。

その部屋のベッドの上で、俺はポンチョに首を通した。

「つむーこれで妾との契約は完了じゃーお主よく耐えたのー。」

間近で嬉しそうに笑ったメルが唐突に半透けじゃなくなつた。

部屋の鏡を見て、そこに元半透け幽霊がはっきり映っているのを確認する。

つまりあれだ、実体化できるよつになつたと。助かった。これで俺が一人どつき漫才をやつてゐるわけではないとわかつてもらえる。

ふうふとため息を吐いて足を崩すと、じいと見てきたメルがニヤツと笑つた。

「だらしがないのう。もう疲れたのか？んん？」

人の足が痺れてると思つて、ニヤニヤしながらつづけてくるメルをやめさせようと手を伸ばす。

「おーすげえ、これが本物の百合か。良いものが見られましたね、兄上。」

「やうだな。これがガールズラブだ。美学だな、弟よ。」

変態白タイツ兄弟ここに極まれり。

部屋の扉のところに現れた喜色満面な変態兄弟を睡然と振り向いた俺の記憶が確かなら、この部屋の扉の鍵は2つで両方とも俺はちゃんとロックしたんだが？

合鍵かマスターキーがあつたとしても、結界を張つたと言つていたメルが呆然としている様子からこいつらは侵入のHキスパートではないかと推測する。

こんな国、いや、こいつらなんて滅べばいいのに。

何とか変態兄弟を追い出して、指差し確認のもと再び鍵をする。結界を張りなおしたメルが大きく頷いて、ぐつと親指を立てた。俺も親指を立てて返すと、妙な連帯感と達成感が湧き上がつてくる。

何だこのやり遂げた感は？

これで世界は平和になつた、へうじのナレーショング聞じえてきたうだ。

「お主と契約を成した妾の結界は元壁じや。これでもう邪魔されることがあるまい！」

腕を組みでつとうに領いていたメルの顔は晴れやかだつた。

ヒカルのポンチョ、見た目は古ぼけて薄汚、

「くたばれ！」
「かはつ！」

見下ろせば、メルの捻りを加えた右ストレートが確実に鳩尾にめり込んでいる。

俺はこんなところで死にたくない。

それにパーティの友達増やそつ計画のこともある。

当然、俺は従順の道を選ぶ。

あー、じほん。

ヒの素晴らしきマンド、見た目からして歴史を感じる美しい一品で
「じれこまして、

「お、お主にそんな風に思われると気色悪いな・・・」

びつぶとおしゃるんですか、お嬢様。

仰け反るよつこにして両腕をわざり顔を顰めているお嬢様をため息を吐いて見つめる。

「いや、今まで通りでいいといつか何といつか・・・あれじゃ、余計なことは考えるな。な？」

「じゃあ人の心を勝手に読むなよ。」

メルが飛び上がって放ったハイキックが馬々と首にキマる。
俺は泣かなかつた。

その前に昏倒したからだ。

翌朝、俺たちは早々と城を出た。

こんなところに長居はしたくないし、やつをと帰つてパーティに新しい友達を紹介してやるねばならんからだ。

第七話 旅立つた俺

「なあ。」

「わかつておる。」

「メルと二人でちらつと振り返った先には、白いタイツが生えた草のかたまりがあった。それも一つ。知りたくもない中身には多大な心当たりがある。

「こんな何も無い平原のど真ん中で移動するものがあれば嫌でも気づくわ。」

「それがとつてつけたような茂みじやなおさらな・・・」

前を向きなおし一人では、とため息を吐く。
そのときだつた。

3歩ほど前の空間がゆらりと歪み、さも空間を越えてきましたと言わんばかりにガタイの良い黒いリザードマンが現れた。
腰に提げた抜き身の円月刀と、太陽の光を跳ね返して煌く硬質な鱗がその存在をしっかりと主張している。

「我は魔王様の配下が一人、豪腕のガルディス。勇者よ、これ以上先には一步たりとて進ませまいぞ。」

2mはあるガルディスの顔が無表情に見下ろしてくる。

これは疑いようのない死亡フラグ・・・だが、この俺の本気を見て

もそんなことが言えるかな？

「私はただの通りすがりの村人です。勇者様ならあちらにいらっしゃいます。」

すっと脇にぞいで、遙か後ろの茂みを手で示した。

ちらりとそっちを見て、もう一度俺を見るガルディス。

「・・・おお、そのようだな。足を止めて悪かつた。失礼する。」

LV1以下の村人才オーラに気づいたガルディスが見事な礼をして後ろの茂みのほうへ歩いていく。

それをしばし見送って、俺たちは再び歩き出した。

しばらく行くと森があり、少し奥には泉も発見した。

ちょっと休もうかとあたりを見回した視線で、立ちかけのフラグに気がついた。

森で悪漢二人に襲われているケモミミ幼女。

真っ白いふわふわのウサミミに、少し長めに切り揃えた榛色の髪が揺れている。

淡い桜色のワンピースには、首のことと袖先と裾に白いもこもこがついていて、同じような白いもこもこがついた淡い桜色のニーハイがつくり出す絶た、

「早よう助けんか！」

「いだつ！」

思いつきり人の頭をハリセンで叩けるならお前が、

「妾は無駄な」とせん王義じやー。」

腕を組んでふんーとそっぽを向いたメルをじとじと睨み下ろす。今は無駄な」とじやないのかよ。

「何じや?」

「イイエ、ナンデモゴザイマセんワ。」

はあつとため息を吐いて、武器を・・・あれ?俺って武器なくね?現在の装備を確認する。

高校の夏の制服一揃いなーり。

メルポンチョ一枚なーり。

紫の石が一個なーり。

以上なーり。

あつれー?まじ武器ないんですけどー。

「根性を見せるのじやー。」

俺は泣いた。

根性つて、そんな・・・

手ぶらで泣々そこへ向かった俺に、早くも悪漢の一人が気がついた。

「ああつー兄いー助けが来やしたぜ!」

「何!?ああ助かつた!そこの君!」

なぜ悪漢が涙を流してこっちを見ているのだろう?

頭の後ろを掻きながら、なるべく穩便にすむよう願つ。

「えーっと、そのへんにしてあげてくれませんか?そんな小さな女

の子を慮めてもつまらないでしょ？」

「なー!」つ、誤解だ！俺たちはつ」

「君は誤解してつ」

必死の形相で叫び出したうちの一人をどんつーと突き飛ばし、何とか逃げ出せたウサミミ幼女が俯いて駆け寄つてくる。

その後ろでは、突き飛ばされた男がもう一人を巻き込んで泉に水柱を立てていた。

結構深そうだな、成仏してくれ。

一応拝んでおいた。

「なあんでお前がついてくるのじやー・さつさと去ねー・すぐに去ねー・

蹴るマネをしているメルを静かに見返すウサミミ幼女。

「わたしは」主人様に助けていただいた。だから「主人様についていくの。」

・・・ん？

「」主人様つて、もしかして・・・」

「そう。『ご主人様は』ご主人様。」

「なあんじやと！？この小動物が！」

「・・・ふつ、それはあなたも同じ。」

いいなあ、子供つてすぐ仲良くなれて。

和み要員も増えたし、これでさらにパーティの友達が増えるわけだしな。

「んじゃ行くか。」

「はい。ご主人様。」

「・・・くつ！」

幼女ばかり引き連れて、俺は魔王城を目指し歩き続ける。

第八話 森の奥へ入った俺

「わたしはファム。種族は見ての通り。」

ぴこっとウサミミを動かしてファムが心細そうに見上げてくる。そんな彼女をなるべく怖がらせないよう、省エネモードの表情筋を駆使して何とか微笑む。

「俺は人間のユウヤ。それでこっちはメル。ポンチョの精霊だよ。」
「阿呆！ポンチョではないわこのたわけ！！」

いつものごとく俺を狙つたメルの拳を、腕をクロスさせたファムがしつかりと受け止めた。

さすが子供とはいえ獣人だ。

いい反射神経をしている。

「ちいっ！」

たたんとバックステップで離れたメルをファムが即座に追いかけていく。

火の玉が降つたり、それを避けたり弾いたり・・・
異世界の子供たちは遊び方が桁違いだな。

平原で遊んでる二人を置いてさらに森の奥へ入つて行くと、かすか

に助けを求める声が聞こえてきた。

普段なら怪しいものには近づかないが、その声が助けてくれたら仲間になります的なものに聞こえて、声を辿るようつと茂みをかき分け進んで行く。

少しして見つけたのは、紫のぼろ布を纏い蹲るようにして木の幹に凭れている子供だった。

伏せた顔はわからないが、その足元でとぐろを巻く珊瑚色の髪は真っ直ぐでかなり長い。

だが問題はその耳だ。

とがった耳先。

つまり・・・エルフ。

ファ、ファンタジー！

虫が花に誘われるよつとふらふらと近づき、その傍にしゃがみこむ。

「大丈夫か？おじょ、」

いや、大丈夫でもないしお嬢ちゃんもないだろ。

そもそも髪が長いからって女子とは限らん。

「う、あ・・・これを・・・」

声に反応したのか、顔を上げたエルフの子供は冷や汗を流し生氣のない顔色をして足首に絡まつた蔓を指差している。

よくわからんがエルフ用の罠か何かにかかつてしまつたのだらつ。青い蔓を2、3度つづいてから握つて、引き千切るように力をこめる。

蔓は思つたより簡単にぶちぶちと千切れだが、その足首についた蔓の痕が青黒く変色していくかなり痛々しい。

どうやらこの蔓はエルフにだけ影響があるようだ。

一つ頷き千切れた蔓を見ていると、深呼吸をした子供エルフが背中

を木の幹に預けるよつとして立ち上がるつとこはじめた。

「立てるか？」

手を貸そつとすると、少しだけ赤みが戻つた顔でにいつと精一杯
らしき微笑みを向けてきてそのまま一人で立ち上がる。

脇にはおもちゃみたいな『がぶら下がつ』ついて・・・
それがなんだかとてもいじらしくて、ついぽろつと口にしつしまつ
た。

ああ、出でしまつたんだ。

俺は早くパティンとこに行かなきゃならんの。

「村まで送つて行こつか？」

驚いたよつに縁の田を丸くしてから子供エルフがわざかに首を振る。

「あ、あたしははぐれなの。だから村なんて、えつと・・・

子供でもはぐれつていうのは村に入れないってことか？

でもこのままじゃまた罠にかかるてそうな氣もするし、子供エルフ
も少し腑きながらちらつちらつと見てくるし・・・

「んー、じゃあ一緒に来るか？これから向かう先は魔王城だけど。

OKしてくれるならまたまたパティに友達が増えるのだが・・・
事情を知らない子供エルフが人差し指を額にあてて首を傾げる。

「どうしてそんな危ないとこかく行くの？」

「俺がそこに住んでるからだよ。」

「どうしてそんなとこかく住んでいるの？」

「魔王と俺が友達だからだよ。」

「どうしてお兄ちゃんと魔王はお友達なの？」

「あいつがイイヤツだからだよ。」

「じゃあ怖くないの？」

「ああ。魔王は素直で優しくてイケメンで素敵なヤツだ。」

心でキラリと微笑みそう言つと、考えるより子供エルフが視線を下げる。

少しして、とても大切なことを決心したようにその大きな田で見つめてくる。

「うん。あたし、お兄ちゃんについていきたい。」

人助けもしたし新たな人員も確保できたし。

良かつた良かつたと、まだ回復しきっていない子供エルフをおぶつて戻る。

一瞬戻る場所を間違えたかと思ったほど、荒れ果てた平原で一人はまだ遊んでいた。

異世界の子供ってめちゃくちゃ元気だな。

第九話 心の友を見つけた俺

『おこやーの、』

「シーア、本当にもう平氣なのか？」

「うん。お兄けやんがここまでおんぶしてくれたから……」

少し照れたように笑つたシーアが左隣に並ぶと、今度はメルがえへん、と偉そうに胸を張つてわくわくしたような目で見上げてくる。

「じゃあ次は妻をおんぶ、」

「みえみえ。」

「ほつ?…なり、小動物その一は構わんのじゃな?」

「…・痛つ…」主人様あ、足がとつても痛いですう。」

「!?」

「うやら足が痛いのを粗鄙我慢してたよつて、しゃがみこんだファムが足を押さえて潤んだ茶色の瞳でじつと見上げてきた。

「つたぐ、お前らはまだ子供なんだから。今度からは痛くなつたらすぐに痛つさだぞ?んじや…・・・」

森沿いの草原で、ファムの前にしゃがんで背中を向ける。

ここまで休憩も無かつたし、やっぱ子供だけじゃそんなに歩けないもんなんだな。

もう少しで町に着く予定だけど……一回休憩しようかと思つた背中にファムが遠慮がちに乗つてくる。

「ほら、遠慮すんな。」

「それなら・・・」

首に腕を回したファームをおんぶして立ち上がると、一回揺すって安定させる。

それでも不安だったのかぎゅっとしがみついて首筋に頭をくっつけてきた。

「あつたかい・・・」

「ムーカーツークー！ なあんじやその勝ち誇った顔はー！ お主もお主じや！ そんな簡単に騙されおつて！！」

「メルちゃん？ ファームちゃんは足が痛いって言つてたからしちゃうがないよ？」

シーアと話してるメルがふるふる震えていて、きつとあいつも足が痛いんだろうと簡単に予想できる。

次はメルの番だな、と思いながら素通りしようとした森と平原の境にある飾り気も屋根もない段差だけの小さな祭壇には黒一色の長剣が意味ありげに刺さっていた。

『おじ小僧、この状況でも我輩に気づかないとぬかすなら、

「うつせいいわー！」のがらくたが！』

どこか苛ついたメルの放った火の玉が祭壇に刺さった黒い剣に命中する。

『・・・頼む。少しでいいから聞いてくれ。』

俺は生まれて初めて剣が泣く瞬間を見た。

いや、見たんじゃない。感じたんだ。

そして直感が告げている。こいつは、心の友だ！

「剣よ、みなまで言つた。俺にはわかる。お前は理不尽な目に遭つてこたなところにいるんだよな？俺と同じじゃないか……だつたら、この旅にお前も連れて行つてやるよ！」

ぐつと親指を立てて心でキラリと微笑むと、黒い剣が嬉しそうに黒光りした気がする。

『では貴様も感じたとこいつのか、この、心搖さぶる波動を…』

「ああ！お前は俺の心友だとはつきりな！」

『そつか！ならば貴様を主と定めようではないか！』

ずずつとこいつ摩擦音を残し、黒い剣が祭壇から抜けるとそのまま高い位置まで浮き上がる。

くるりと切先を上に向けてゆつくりと降りてくる姿は、黒くなれば伝説の剣のように神々しい。

それに右手を伸ばししっかりと柄を掴んだ瞬間、ゆらりと剣のまわりが揺らめこてうつすら現れた黒い霧が剣身を取り巻くみづに漂いだした。

『我輩は闇の深淵より生じし暗黒魔剣、ディジエスター・ゾー・ジ。も、共に世界を混沌に導こうや！』

あー、やる気になつてるとこ悪いがちょっと待つてくれ。

お前つてもしかして連れてつちやダメな種類の剣じゃないか？

「置いてつていいよな？」

気持ち、爽やかな笑みを浮かべて右手の黒い剣を見た。

『何故だ！？』

「お前のことは忘れない。」

祭壇に元通りに戻すとわざかにキコキコ揺れて、何でどうしてと騒いでいる。

『主はメルティアーナを連れているではないか！なのにどうして我輩はダメなのだ！？』

「え？ お前メルを知ってるの？」

知り合い？とメルを振り返れば、メルは不機嫌そうに眉間にシワを寄せてそっぽを向いてしまった。

『・・・まさか、聞いてない、のか？』

えー！ 嘘ー！と頬に両手をあてて黒い剣が仰け反ったように見えたのは気のせいか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7344m/>

俺と魔王

2011年2月4日04時10分発行